

特集

暮らしの知恵を未来に生かす
～里山の恵みと生物多様性～

畑中 健一郎・富樫 均・須賀 丈

ほんの数十年前まで、多くの地域では暮らしに必要な物資の多くを里山から得ていました。田んぼの肥料にする刈敷や燃料の薪を雑木林から採り、馬の餌にする草を採草地から採るなど、当時の人々の暮らしは、多様な生物が生息する里山をうまく工夫しながら持続的に利用することで、その恵みを大いに受けてきました。

当研究所が県内各地で聞き取り調査をした結果から、戦前の里山では稲作と養蚕を中心に、馬の飼育や狩猟、炭焼きなど、さまざまな生業を組み合わせ生活が営まれていた様子がうかがえます。食べ物は田畑で収穫したもののほか、山菜や木の実、川魚やタニシ、ジバチを始めとする野生の小動物など、身近に存在する食材を最大限に活用して、質素ながら各地域で特徴ある食事をしていました。また子ども達も、川で泳いだり、スキーやスケートに興じたりしたほか、グミとりや魚とり、蜂追いなど、おやつやおかずの採取を兼ねた遊びも多く、まわりの自然や身近にある物を利用して遊んでいたことがわかりました。



棚田の景観（長野市北郷）

ところが戦後の経済成長が進むにつれ、里山と人の暮らしとの関係が急速に薄れました。人々は勤めに出るようになり、燃料や食料など生活に必要な物資も国外を含む地域の外で生産されたものを購入するようになりました。その結果、里山に人の手が入らなくなり、耕作放棄地の拡大や森林の手入れ不足が指摘されるようになりました。かつて採草地などとして利用された広大な野草地も縮小し、今では森林化している場所が少なくありません。さらに都市近郊などでは、開発によって里山の地形や植生そのものが消失したところもあります。このような里山の質的・量的な変化によって、里山に生息する動植物

も大きな影響を受けました。たとえば秋の七草のひとつであるキキョウや野草地にすむチョウなどかつてはごく普通に見られた身近な動植物の絶滅が心配されるようになった一方、シカやクマなどの野生動物による農林業被害が大きく増えました。



キキョウ（木曾町開田高原）

この問題の根底には、人の暮らしが里山から離れてしまったことがあります。生物多様性国家戦略でも、里山地域での人の営みの縮小を、国内で進行する生物多様性の3つの危機うちの1つとしています。

しかし自然に手を入れ、そこからその恵みを長く受けてきたかつての SATOYAMA（里山）の暮らしには、世界各地の伝統との共通点もあるのではないかと国際的にも議論されています。かつて信州の里山は多様な自然と多様な暮らしの文化が会う場でした。今日の大量生産と大量消費に支えられた社会のあり方を見直すうえで、かつての自然と文化のむすびつきには学ぶべき点が多くあります。里山の記憶と知恵は、将来への大きな財産になるのではないのでしょうか。



白馬村青鬼地区